

「没後30年 諏訪直樹展」 ガイドツアーⅡ

波濤図 No. 1（右） 波濤図No. 2（左） 1980年

（Iのつづき）1980年、作品は変貌します。絵画は壁からとびだして現実空間のなかで立体的に表現されます。諏訪がこれまで絵の平面性を重視する厳格な表現をしてきただけに、これは大きな変化でした。



波濤図 No. 1 (右) 波濤図 No. 2 (左) 1980年

一見、屏風のような画面、よく見ると各面の幅が異なり、屈折の角度はすべて直角です。描かれた面を展開すると図5のようになり、 $a:b=b:c=c:d \div 1.618:1$ となってここでも黄金比が使われていることがわかります。

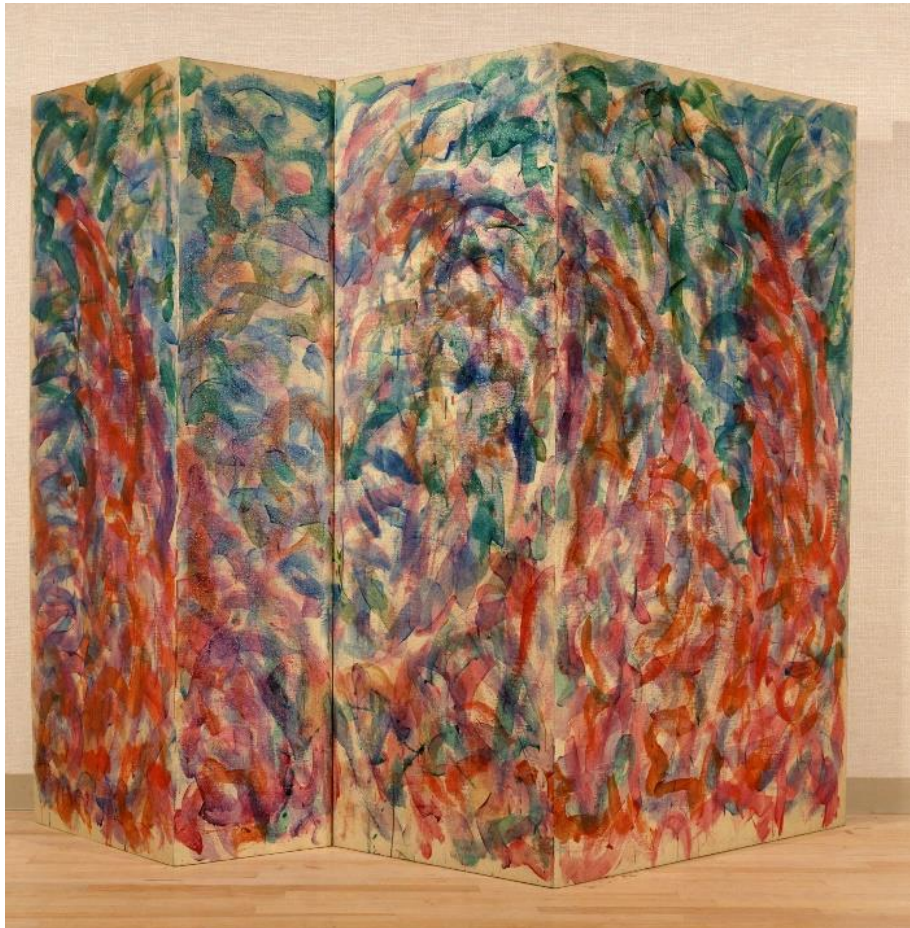
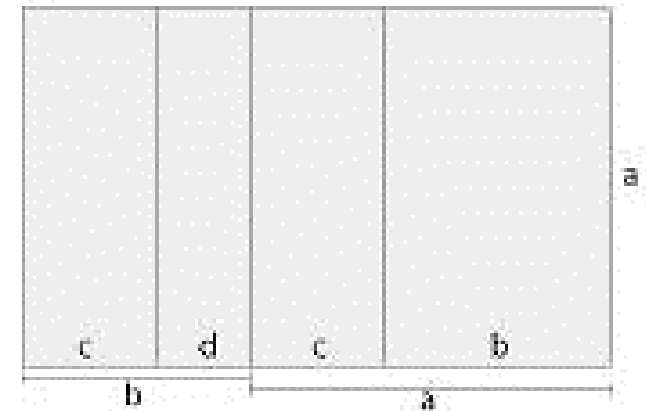
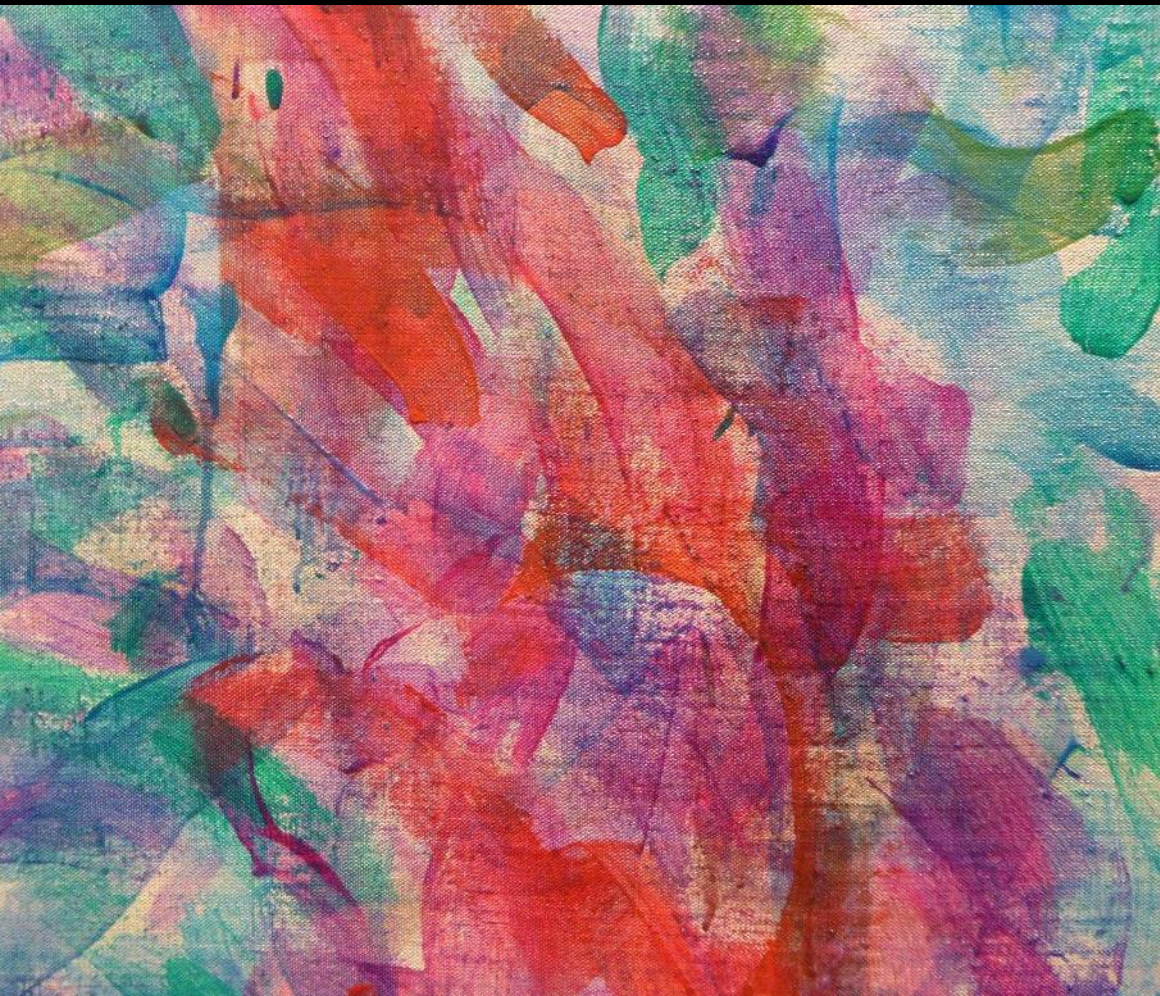


図5



波濤図 No. 1 (右) 波濤図No. 2 (左) 1980年

多方向に激しい動きを示す太い筆によるストローク。運動感やエネルギーが伝わってきます。絵具は透明性があり、色の重なりがよく見えます。近くで見ると混沌とした画面ですが、少し離れて見ると大きなかたちが見えてきます。2点双方に、タイトルによると波を表すと思われるとがったかたちが描かれ、2点並べるとそのかたちは左右対称で、しかし色は赤と緑が反転しています。青や紫、オレンジ色も加えられているようですが、どんな効果をもたらしているのでしょうか？



波濤図 No. 1 (右) 波濤図No. 2 (左) 1980年

多方向に激しい動きを示す太い筆によるストローク。運動感やエネルギーが伝わってきます。絵具は透明性があり、色の重なりがよく見えます。近くで見ると混沌とした画面ですが、少し離れて見ると大きなかたちが見えてきます。2点双方に、タイトルによると波を表すと思われるとがったかたちが描かれ、2点並べるとそのかたちは左右対称で、しかし色は赤と緑が反転しています。青や紫、オレンジ色も加えられているようですが、どんな効果をもたらしているのでしょうか？



屏風状の作品の後、諏訪は衝立を並べたようなこの大作を発表します。これも近代のタブローから逸脱した形式です。絵画が成り立つ要件を根本的に捉えなおすような制作を進めてきた諏訪は、過去の日本絵画を研究、参照することによって新たな境地を開きました。

日本美術への参照は、こうした形式面のみならず、前作や本作の主題（タイトル）や金色や銀色による画面の下塗りにも見られます。



日月山水1（左） 日月山水2（中） 日月山水3（右） 1982年

この作品においても各パネルの形状や配置は黄金比にもとづきます。絵はパネルの両面に描かれ、私たちは作品の周囲をまわりながら絵を見るという少し変わった体験をすることになります。

前作よりさらに奔放で即興的に見える筆遣い。ストロークの方向や位置にも自由さが見られます。しかし、よく観察すると何か全体的な構成が見えないでしょうか。垂直線と斜線による三角形、画面の端に接する大きな円弧、それはタイトルにも関係がありそうです。



PH-2-8602 1986年



1982年頃から諏訪は、やはり東洋的な掛け軸の形式を採用し、87年頃までに数多くの軸作品を描いています。

この作品ではニュアンスに富んだ深い色の地塗りあるいは背景が特徴です。そして幾何学的な、直線によるかたちが構図を決定づけています。緑の太い線で表された大きい鋭角、描線や彩色の広がりを断ち切るかのような直角に折れる直線などが見られます。

PH-2-8602 1986年



一番目を引く要素は、金色を中心とした多色のストロークの錯綜、飛沫をも残す絵具の乱舞です。しかし、それは前作のように画面全体を覆うのではなく、画面の一區画に閉じ込められているかのようです。

例えば、この騒がしい領域にくさびを打ち込むかのような左の三角形は、この領域の手前にあるように見えますか？ それともこの領域はここで三角に切り取られ、その背後の景色がのぞいているのでしょうか？ 画面の大胆な区割りは、こうした視覚効果をも伴って私たちに様々な読みを促す複雑さをもたらしています。



PS-8717 八景残照I（左） PS-8718 八景残照II（右） 1987年

7年前の屏風のような作品は、黄金比にもとづく独特のかたちでしたが、この作品はより伝統的な屏風仕立ての大作です。この形式によって、横に長くパノラマのように展開する絵画が生まれました。

私たちの視野全体を覆うような迫力ある大画面ですが、造型的な要素は前ページの軸作品とほぼ同じです。深い陰影に富んだ地塗り、直線によるシャープなかたちと、奔放にからみ合う躍動的な筆致という、性質の異なる要素を組み合わせています。

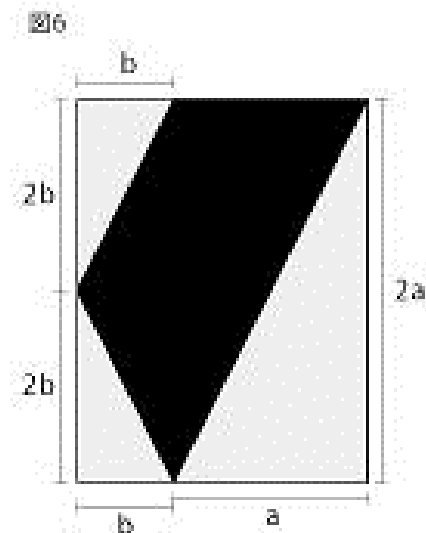
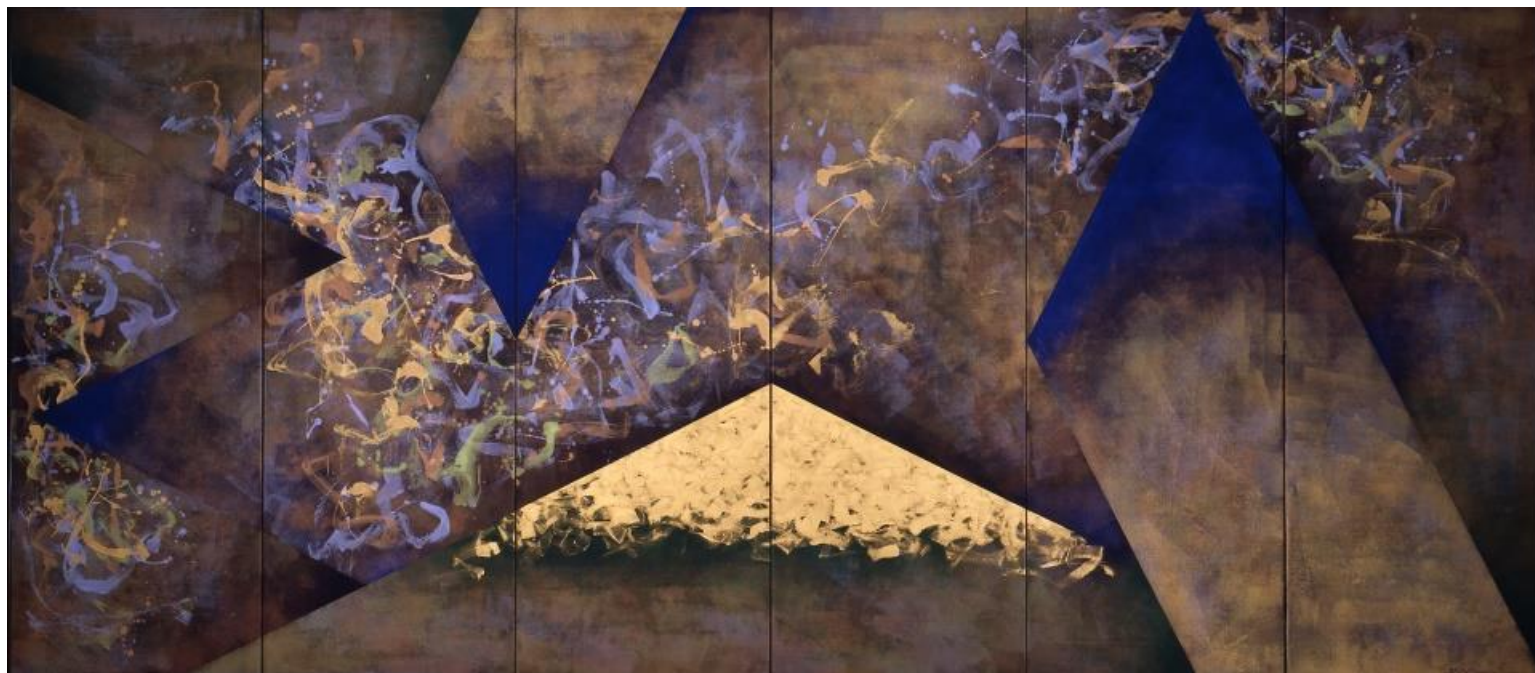
以前のような赤と緑など補色の単純な対比は見られなくなり、金色、紺色、緑色が支配的です。こうした色の選択にも伝統的な日本美術に対する意識があるのでしょうか。

画面にいくつかある大きなとがったかたちは、その先端が金や紺の彩色で強調されて鋭さを増しています。また、とがった先端のいくつかは画面のパネルの端に接しているため、より緊張感が感じられるのではないのでしょうか。



実はこのとがったかたちの数々は、直角を挟む2辺が1:2となる直角三角形をもとにしています。長方形から大小のこの三角形3つを切り取ると、諏訪の絵に以後よく登場するくさび型ができます（図6）。作品のI、II両方の右側三分の一と、図6を比べてみてください。

絵のなかの直線の傾きや鋭角はすべて、この三角形の鋭角、あるいはそれを2つ合わせた角度からなります。こうした図形的原理の採用が、様々な要素が混在する画面に枠組みや規律のようなものを与えているのかも知れません。



PS-8717 八景残照I（左） PS-8718 八景残照II（右） 1987年

この作品で確立されたのとほぼ同じ造型的な要素によって、翌年から大作《無限連鎖する絵画》の制作が開始されます。屏風形式の作品に見られた、横に長く展開する画面のあり方がさらに拡張され、3年かけて50m以上にわたって連続する長大な絵画が描かれました。画家の突然の死によってこれは未完の遺作となります。



作品リスト(後半 * 本ファイルに画像を掲載していない作品も含まれます)

	タイトル	制作年	技法・材質	形状	寸法(cm)	初出	備考
8	波濤図 No. 1	1980	アクリル・綿布、パネル	屏風状	194×222×79	個展「波濤図」1980年	
9	波濤図 No. 2	1980	アクリル・綿布、パネル	屏風状	194×222×79	個展「波濤図」1980年	
10	いたるところで	1980	アクリル・綿布、パネル	屏風状	79×92×35	個展1981年	賛美小舎：上田國昭・上田克子氏寄贈
11	敗れざるかもしれない兵士	1980	アクリル・綿布、パネル	屏風状	91×104×41	個展1981年	賛美小舎：上田國昭・上田克子氏寄贈
12	日月山水 1	1982	アクリル・綿布、パネル	衝立3軀	210×[80+50+130]	個展「日月山水」1982年	寄託
13	日月山水 2	1982	アクリル・綿布、パネル	衝立2軀	210×[80+50+130]	個展「日月山水」1982年	寄託
14	日月山水 3	1982	アクリル・綿布、パネル	衝立1軀	210×[80+50+130]		寄託
15	PH-2-8602	1986	アクリル・綿布	軸状	260×195	「'86岐阜現況展」1986年	
16	PS-8717 八景残照 I	1987	アクリル・綿布	6曲1隻	168×378	個展「屏風絵」1988年	
17	PS-8718 八景残照 II	1987	アクリル・綿布	6曲1隻	168×378	個展「屏風絵」1988年	
18	PS-9002	1990	アクリル・綿布	6曲1隻	160×360	「現代“屏風”絵展」(彩林画廊)1990年	
19	PT-9055	1990	アクリル・綿布		160×120	個展「土」1990年	賛美小舎：上田國昭・上田克子氏寄贈
20	PT-9056	1990	アクリル・綿布		160×120	個展「土」1990年	賛美小舎：上田國昭・上田克子氏寄贈

このPDFファイルは、三重県立美術館の「コレクションによる特別陳列 没後30年 諏訪直樹展」（2020年2月1日－4月5日 ＊ただし2月29日から新型コロナウイルス感染拡大防止のため閉室中）会場で配布しているパンフレットのテキスト（執筆：速水豊）を会場風景や作品写真とともに再構成したものです。図5、6はパンフレット（デザイン：川村格夫 | ten pieces）のデータを転用。ファイルは前半（I）と後半（II）に分かれており、現在ご覧いただいているものが後半です。無断転載はお控えください。

「没後30年 諏訪直樹展」ガイドツアーII 2020年3月26日発行 ©三重県立美術館